



中里介山著

大菩薩峠

大菩薩峠刊行會

昭和二十七年十一月五日 印刷
昭和二十七年十一月十日 再版
昭和二十八年三月一日 三版
昭和二十八年四月二十日 再版

(乱丁、落丁はお取替いたします)

大菩薩峠(第二卷)

定価三百八十円

送料 五〇円

著作権者 中里幸作

発行者 中里幸作

印刷者 森高繁雄
東京都品川区南品川五ノ十三

東京都千代田区神田錦町三丁目十三番地

大菩薩峠刊行会

発行所 株式会社 彩光社

振替 東京 一九三九七六番

富士高速印刷株式会社印行

大
菩
薩
峠

第
一
卷

目次

甲源一刀流の卷	………	五
鈴鹿山の卷	………	一四三
壬生と島原の卷	………	二七
三輪の神杉の卷	………	三六三
大菩薩峠解題	………	寺島 樞史 四七七
中里介山著作年表	………	四九五
決定版刊行に際して	………	梁取 三義 五〇六

題 裝 口 寫 凸
字 畫 繪 真 版

道 橫 小 著 著
重 山 川 者 者
信 大 亭 肖 筆
教 觀 錢 像 蹟

編
纂
責
任

梁 寺
取 島
三 枉
義 史

一
甲源一刀流の巻

一

大菩薩峠は江戸を西に距る三十里、甲州裏街道が甲斐の國は東山梨郡萩原村に入つて、その最も高く最も險しきところ、上下八里に跨がる難所がそれです。

標高六千四百尺、昔、貴き聖が、この嶺の頂きに立つて、東に落つる水も清かれ、西に落つる水も清かれと祈つて、菩薩の像を埋めて置いた、それから東に落つる水は多摩川となり、西に流るるは笛吹川となり、いづれも流れの末永く人を濕ほし田を實らすと申傳へられてあります。

江戸を出て、武州八王子の宿から小佛、笹子の險を越えて甲府へ出る、それが所謂甲州街道で、一方に新宿の追分を右にとつて往くこと十三里、武州青梅の宿へ出て、それから山の中を甲斐の石和へ出る、これが所謂甲州裏街道、(一名は青梅街道)であります。

青梅からは十六里、その甲州街道第一の難所たる大菩薩峠は、記録によれば、古代に日本武尊、中世に日蓮上人の遊跡があり、下つて慶應の頃、海老藏、小園次などの役者が甲府へ乗り込む時、本街道の郡内あたりは人氣が悪く、ゆすられることを怖れてワザ／＼この峠へ廻つたと云ふことです。

人氣の險惡は山道の險惡より尙ほ惡いと見える。それで人の上り煩ふ所は春も亦上り煩ふと見え、峠の上は今新緑の中に櫻の花が眞盛りです。

「上野原へ、盗人が入りましたさうですが」

「へエ上野原へ盗人が……」

「それがはや、お陣屋へ入つたといふですがから驚くでがす」

「驚いたなあ、お陣屋へ盗賊が……どうしてまあ、この頃のやうに盗賊が流行ることやら」

妙見の社の椽に腰をかけて話して込んで居るのは老人と若い男です、この兩人は別に怪しいものではない、このあたりの山里に住んで、木も伐れば焼畑も作ると云ふ人達であります。

これ等の人は、この妙見の社を市場として一種の奇妙なる物々交換を行ふ。

萩原から米を持つて来て、妙見の社の前へ置いて歸ると、數日を経て小菅から炭を持つて来て、そこに置き、先に置いてあつた萩原の米を持つて歸る。萩原は甲斐を代表し、小菅は武藏を代表する。小菅が海を代表して魚鹽を運ぶことがあつても、萩原はいつでも山のものです。若しもそれ等の荷物を置きばなしにして冬を越す事があつても無くなる氣づかひはない——大菩薩峠は甲斐と武藏の事實上の國境であります。

右の兩人は、此の近まわりに盗賊のはやることを話し合つて居たが結局、

「どろぼうが怖いのは、物持の衆の事よ、こちと等が家はどろぼうの方で怖れて逃げるわ」

といふことに落ちて、笑つて立たうとする時に、峠の道の武州路の方から青葉の茂みをわけて登り来る人影があります。

「あ、人が来る、お武家様見たやうだ」

二人は少しあわて氣味で、炭俵や糸革袋が結びつけられた背負梯子へ兩手を突込んで今登り來ると云ふ武家の眼をのがれるものゝやうに、社の裏路を黄金澤の方へ切れてしまひます。

一一

程なく武州路の方からこゝへ登つて來たのは彼等兩人が認めた通り、一箇の武士でありました。黒の着流しで、定紋は放れ駒、博多の帶を締めて、朱微塵、海老鞆の刀脇差をさし、羽織はつけず、脚絆草鞋もつけず、この險しい道を、素足に下駄穿きでサツ／＼と登りつめて、今頂上に見晴らしのよい處へ來て、深い編笠をかたげて、甲州路の方を見廻しました。

歳は三十の前後、細面で色は白く、身は瘠せて居るが骨格は冴えて居ます。この若い武士が峠の上に立つと、ゴーツと青嵐が崩れる。谷から峰へ吹き上げるうら葉が、海の浪がしらを見るやうにさわ立つ。そこへ何か知らん、寄せ來る波で岸へ打ち上げられたやうに飛び出して來た小動物があります。

妙見の社の上にかぶさつた栗の太木の上に固まつて、武士の方を見つめては時々白い齒を剝いてキヤツ／＼と啼く、その數、十匹ほど、こゝの名物の猿であります。

柳澤峠が開けてから後の大菩薩峠と云ふものは、全く廢道同様になつてしまひましたけれど、今

日でも通れば通れないことはないのです。そこを通つて猿に出くわすことは珍らしいことではないが、それを珍らしがつて悪戯でも仕かけようものなら、却つて飛んだ仕返しを食ふことがあります。

人の弱身を見るに上手な此の群集動物は、相手を見くびると脅迫する、敵はない時は味方を呼ぶ。味方はこの山々谷々から呼應して來るのですから、初めて通る人は全くオドカされてしまひます。が、旅に慣れた人は、その虚勢を知つて自らそれに處するの道があるのであります。

右の武士は、慣れた人と見えて、一眼猿を睨みつけると、猿は怖れをなして、尙ほ高い所から、しきりに擬勢を示すのを、取り合はず峠の前後を見廻して人待顔です。

さりとて容易に人の來るべき路ではないのに、誰を待つのであらう、斯うして小半時もたつと、木の葉の繁みを洩れて、かすかに人の聲がします。その聲を聞きつけると、武士はズカ／＼と萩原街道の方へ進んで、松の木立から身を斜にして見おろすと、羊腸たる坂路のうねりを、今しも登つて來る人影は、たしかに巡禮の二人づれであります。

「お爺さん——」

よく澄んだ子供の聲がします、見れば一人は年寄で半町ほど先に、それと後れて十二三位の女の子——今「お爺さん」と呼んだのは、この女の子の聲でありました。

右の二人づれの巡禮の姿を認めると、何と思ふてか武士は、つと、妙見堂のうしろに身をかくし

ます。

木の上では従前の猿が眼を圓くする。

「やれ／＼頂上へ着いたわい、おゝ、こゝにお堂がござる」

年寄の方の巡禮は、社の前へ進んで笠の紐を解いて跪まると、

「お爺さん、こゝが頂上から」

面立の愛らしい、元氣もなか／＼よい子でありました。

「これからは下り一方で、日の暮までに河内泊りは樂なものだ、それから三日目の今頃は三年ぶりでお江戸の土が踏める——さあお辨當をたべませう」

老爺は行李を開いて竹の皮包みを取り出すと、女の子は、

「お爺さん、その瓢箪をお貸しなさい、さつき此の下で水音がしましたから、それを汲んでまゐりませう」

「おゝさうだ、途中で飲んでしまつたげな、お爺さんが汲んで來ませう、お前は此處で休んでおゐで」

腰なる瓢箪を抜き取ると、

「いゝのよ、お爺さん、あたしが汲んで來るから」

女の子は、老人の手から瓢を取つて、ついこの下の澤に流るゝ清水を汲まうとて山路をかけ下り

ます。

老人は空しくそのあとを見送つて、ぼんやりして居ると、不意に背後から人の足音が起ります。

「老爺」

それは最前の武士でありました。

「はう」

老爺は、あわたとしく居ずまひを直して挨拶をしようとする時、彼の武士は前後を見廻して、

「こゝへ出る」

編笠も取らず、用事をも云はず、小手招きするので、巡禮の老爺は怖るゝ、

「はい、何ぞ御用でござりまするか」

小腰をかゞめて進みよると、

「彼方へ向け」

この聲諸共に、パツと血煙が立つと見れば、何と云ふ無慘なことでせう、あつと云ふ間もなく、胴體全く二つになつて青草の上にのめつてしまひました。

二

「お爺さん、水を汲んで來たよ」

瓢箪を捧げた少女は、いそ／＼とかけて來たが、老人の姿の見えぬのを少しばかり不思議がつて

「お爺さんは何處へ行つたらう」

お堂の裏の方へでも行つたのかしらと、來て見ると、

「あれ——」

瓢箪を投げ出して縋りついたのは老人の亡骸でした。

「お爺さん、誰に殺されたの——」

亡骸をかき抱いて泣きくづれます。

こゝにこの不慮の椿事を平氣で高見の見物をして居たものがあります。最前の武士の一舉一動から、老人が斬られて少女の泣き叫ぶ有様を、目も放さずながめて居たのは、彼の栗の木の上の猿です。

猿共は、今や木の上からゾロ／＼と下りて來ました。

老少二人の伏し倒れた周圍を遠くから取りまいてだん／＼に近寄ると、小さなやつが、いきなり飛び出して、少女の頭髮にさしてあつた小さな簪をちよつとツマんで引き抜き、したり面に仲間のものに見せびらかすやうな身振をする。それを見た、も一つの小猿は負けない氣で、少女の頭髮から櫛を抜き取つて振りかざす。その間に大猿共は、さきに老爺が開きかけた竹の皮包みの握飯を引出して口々に頬ばつてしまふと、今度は落散つて居た手頃の木の枝を拾つて、何をするか

と思へば、刀を差すやうな風に腰のところへ當がひ、少女の背後へ廻つて拔打に——つまり最前さいぜんの武士のやつた通りに——その木の枝で少女の脊中をなぐりつけました。

我を忘れて泣き伏して居た少女は、此の不意の一撃いげきで、

「あれ——」と飛びのいたが、氣丈な子でした。直に有り合はす木の枝を拾ひ取つて振り上げると、猿共は眼を剥き出し白い齒を突き出してキヤツ／＼と叫びながら、少女に飛びかゝらうとして、物凄ひ光景になりましたが、折よくそこへ通りかゝつた旅の人があります。

年配は四十位で、菅笠をかぶつて堅縞の風合羽を着、道中差を一本さして居りましたが、手に持つてゐた松明たいまつの火を振り廻すと、今まで囁つて居た猿共が、急に飛び散らかつて、我れ勝に元の栗の大木へと馳せ上ります。

旅に慣れた證據は、此の旅人の持つて居る松明たいまつでわかります。大菩薩を通るものは獸類を逐ふべく、松の木のヒデといふところでこしらへた松明を用意します。獸類の中でも猿は殊に火を怖れおそるものであります。右の旅人はその松明を消しもせず、

「姉さん、怪我はなかつたかね」

近く寄つて見て、

「おや／＼、人が斬られてゐる！」

少女を掻き分け屍骸へ手をかけ、その斬口きりぐちを檢べて見て、

「よく斬つたなあ、これだけの腕前を持つてゐる奴がまた何だつて此んな年寄としよりを手にかけてらう」旅人は歎息して何をか暫らく思案して居たが、やがて少女を慰め勵まして、ハキ／＼と老爺の屍骸を押し片附け、少女を自分の脊に負うて、七つ下りの日を後ろにし、大菩薩峠をず／＼と武州路の方へ下りて行きます。

四

大菩薩峠を下りて東へ十二三里、武州の御嶽山と、多摩川を隔てゝ向き合つた處に、杣もみのよく實さばるる澤井といふ村があります。この村へ入ると、誰の眼にもつくのは、山を負うて、冠木門かききもんの左右に、長蛇の如く走る白壁に黒い腰をつけた塀と、それを越した入母屋風の大屋根であつて、これが机龍之助の邸宅ていたくであります。

机の家は相馬の系統を引き、名に聞えた家柄であるが、それよりも今世間いませけんに知られてゐるのは、門を入ると左手に、九歩と五歩とに建てられた道場があります。いつでも此の道場に武者修業の五人や十人ゴロ／＼してゐないことはないものでありますが、今日はまた話はなしがやかましい。

「お聞きなされましたか、昨日とやら大菩薩に辻斬つちざしがあつたさうにござります」

「ナニ大菩薩に辻斬が……」

「年老つた巡禮が一人、生胴いまだらを物の見事にやられたと甲州から來た人の専ら噂でござりまする」